分科会8．「健康づくりと看護」報告

ファシリテーター：井　出　成　美（千葉大学看護学部）
坪　内　美　奈（千葉大学大学院看護学研究科博士後期課程）

1）分科会のねらい

2年間の討議において，健康のあらゆるレベルに対して，健康の質をより高めていくことが大切であり，そのためには健康問題を抱えた個人への援助と共に，その個人を取り巻く周囲の人々やリスクを潜在的に抱えた人に対しても看護が関わる必要性，重要性が確認できた。今年は，人々の健康をより高いものにしていくための看護の可能性や方法を明らかにしたいと考え，様々な領域からの健康づくりに関する具体的事象を求めた。

2）討論の概要

発表1「退院患者が地域で暮らしていくための援助について」
中嶋　秀明（千葉大学医学部附属病院）

発表2「独居痴呆老人とその家族に対する保健婦（士）活動の一例から」
戸辺　　誠（白浜町役場）

発表3「保健福祉系短期大学保健室における女子の貧血検診と健康づくり」
亀崎　路子（千葉大学大学院看護学研究科博士前期課程）

健康づくりに看護はどのように関わっていけるかという，まだ定義が不明確な分野について考えていくことがテーマなので，自分の活動が健康づくりに貢献しているのではないかと自分で感じている実践例が討論の素材となっていた。分野も，精神科病棟の看護・地域の保健婦活動・短大保健室での看護活動と広い分野の実践例が素材だったので，実践例一つ一つについて，そこで看護が健康づくりに貢献できたことは何かを確認していくという手順ですすめていった。

(1)　素材：精神科病棟からの退院時の看護（中嶋氏）

素材提供者の中嶋氏から，退院患者の家族のストレスに気づき，家族員との面接の中では，その実践例において，患者ばかりでなく家族の潜在したニーズに気づき，対応していくことも病棟看護でできるということ，そのことが健康づくりに貢献できたと感じている部分であると報告した。

参加者の中には，病院で働く看護職はおらず，地域看護関係者が多かったが，このような家族にも目をむけた看護が病棟で行われていることに対し，賛辞の意見が出され，地域で受けとめる側の立場から肯定的な意見がだれた。また，助産婦経験者である参加者の一人からは，子育て不安を抱えたまま退院する産婦を多く見てきていて，電話相談という手段でしか対応できないもどかしさを感じたという体験も出された。このような話の流れから，患者が退院して自分の生活に戻っていく時の，本人及び家族の抱える様々なニーズに応えていく看護が病院・地域双方に重要で，新たに発生する健康問題を未然に防ぐことや患者・家族の生活の質の向上に，看護がさらに貢献できることを確認した。そして，この一看護士の試みがここで終わりにならずに，今後継続していくためには，病棟内でコンセンサスを得て組織的に取り組めるようにしなければならないことが課題として確認された。

(2)　素材：独居痴呆高齢者への支援（戸辺氏）

事例提供者の戸辺氏から，具体的な援助策を参加者で考えたいという希望が出され，その方向で話が進んだ。参加者から次のような意見が出された。

- 痴呆の老人がその地域で暮らせるためには，何か役割をもてるといいのではないか。ケアをされる側でも，他人に対してケアできる部分もある。実質的な他者への支えになっていなくても，形だけでもその人が人の役に立っているという気持ちが持てるようにする。それは，痴呆の患者であってもその人の持っている健康の部分を引き出すことになると考えられる。
- 昔，地域の役員をしており同年輩の人に今の姿をさらしたくない気持ちがあるのならば，若い世代との交流が持てるように考えてもよいのでないか。
- 本人が給食サービスを利用したくないと言っても，体のことを考えた時食事の面が不十分であるならば，それを整えようとする必要がある。
- ボランティアとしての地域保健推進員による独居老人の全数訪問調査から看護職の援助につながったケースであるが，それ以降の関わりはない。推進員が痴呆の老人を訪問してみてどのように考えているのか，地域の高齢化率が非常に高い状況でどういう気持ちで声をかけているのか等，人が人を支える意識をとらえ，それ支えていくことにより暮らしやすい地域づくりに向かうのではないか。
- 痴呆老人に対する一般の人々の理解を高めていくには，研修や会などの機会を利用して教育するのも一つの方法だが，ごく近隣の人が自然なかかわりで，病んでいる人に関わっていることが考えられるので，日常の生活の中での人々の関わりがどうなっているのかとらえ，それを促していくことも大切である。

これらの意見から，著しく健康を障害された高齢者の一人暮らしを支える時，家族や近隣者などその周囲の者の意識や健康にも目を向け，それらの者が本人をうまく支えられることを支援することが看護の関わりとして重要で，地域の保健婦（士）には，地域づくりといった観点で健康づくりに貢献することが求められていることが確認された。

(3)　素材：短大保健室における貧血の保健指導（亀崎氏）

貧血の予防と，学生が健康を自分でつくっていくという意識を身につけていく事を目的として貧血検診とその事後指導を行った経過が報告された。これらの活動について以下のような意見が出された。

- 保健室の看護職として個別対応を細かくしており，個別対応の大切さが学校保健においても重要であることを再確認した。

・貧血予防の取り組みを工夫して行っているが，それが最終の目標ではなく，学生に学生自身の生活を振り返らせ，自分の問題として考えさせ，自分で健康を守る意識をつくるきっかけづくりであったことが確認できた。学生は青年期であり，また今後は人の健康を支えていく立場につく人達なので，その活動は意味がある。
・貧血予防の取り組みが学生に自分で健康をつくっていくという意識を高めるきっかけ作りであることが確認できたが，それは行動レベルとしてどのように現れるのか。また，個人の行動レベルに現れるだけでなく，学生同士の相互作用が増すなどの影響も考えられる。
・学生との相互作用が大事であったが，それができるようにするためには検診後のフォローを行う医療機関との連携が不可欠で，医療機関との関係づくりに努めたことも看護の関わりとして重要であった。

3）今後の研究課題

健康づくりについて考える中で，まず，健康という概念について，狭い意味ではなく，生活の質や人々の幸せといった概念も含む広い意味の概念が確認できた。そういった意味で，あらゆる分野の看護職がさらに健康づくりに貢献できることが確認できたが，そのような取り組みが一試行にとどまらず，普遍的に恒常的に行われるようにするための組織やシステム作りを，自分の職場や対象の居住する地域にどのようにつくっていけるかが今後の課題としてあがる。